

尾張はかり座の歴史（3）

★尾張はかり座の歴史を全3回にわたりご紹介します。

株式会社 守随本店

早川 静英

明治以後、昭和初期までに、名古屋守随は当主の人材に恵まれ、大いに発展を遂げ、職人数でも100人を超えていたといえます。当時に経済規模からいってこの規模は相当のもので、全国的に見ても規模は1～2を争うものではなかったかと考えますが、よく調べてみますと、江戸時代より引き継いできた木工技術がはかりだけではなく、婚礼家具などに手が広げられ、もともと婚礼については派手な名古屋地区では、漆器や、蒔絵象嵌を施した数々の婚礼道具を盛大に生産していたらしい。これらはすべてはかりの製造技術をそのまま利用できるわけで企業家としては危なげのない業務多角化を展開していたようであります。広小路地区に当時としては珍しい3階建ての広大な木造家屋をたてております。（写真参照）

しかし昭和の発展も10年代に入り曲がり角を迎えます。それまで頑張ってきた当主がなくなり、後継者はつぎつぎと太平洋戦争などに駆り出され、事業は停滞を余儀なくされます。そして昭和18年、病身の15代の当主（守随貞三氏）が後継者もなく、亡くなり、その翌年には、大空襲により営業所も工場も消失。事業はストップとなりました。明暦4年以來の尾張はかり座はここで一時中断の憂き目となりました。

昭和20年の8月、太平洋戦争は終結を迎え、歴史は新たな時間を歩むことになりました。海外から続々と生き残りの兵士たちが帰還してまいります。守随本店の未亡人の甥の早川登が9月には上海よりいち早く帰国。叔母の家に身を寄せます。近くには元守随本店の老工場長が住んでおり、さっそく、守随本店の復活を図ることになりました。しかし、当時の日本ははかりの製造には厳しい制約を設け、免許制を敷き、簡単には開業できない状態でした。その交渉役を早川登が引き受けるのでありますが、お百度を踏むぐらい東京の通産省に足を運んだといえます。例の置いてきた名刺の枚数がものを言うところらしい。とどのつまりは、江戸時代からの名家だからということで免許がおりたと言っておりました。ご先祖の御威光ですか。尾張はかり座の復活となりました。16代の当主は未亡人、守随すず、ついで昭和32年17代に早川登が就任し、平成元年、18代に筆者早川静英が就任し現在に至っております。ちなみに、筆者の長女智子が守随家の養子となり祖廟を引き継いでおります。現状については、守随本店のホームページをご参照ください。

（第三篇にて連載終了）

守随本店銅版画入りのチラシ広告（明治二十年代）

